

日ラグ協発 21-123

2021年5月23日

関東・関西・九州ラグビーフットボール協会

理事長 各位

都道府県ラグビーフットボール協会

理事長 各位

(公財)日本ラグビーフットボール協会

(承認済み・押印省略)

専務理事

### ルーリング 2021-2 「競技規則 10.4」

#### (競技規則の確認)

拝啓、平素は日本ラグビーの普及発展につきまして多大なるご尽力を賜りまして厚く御礼申し上げます。

さて、競技規則につきまして、ワールドラグビーよりこのほど、下記の通りルーリングに関する通達が出されました。日本協会でもこれを受け、ここに通知いたします。貴協会におかれましても加盟都道府県協会、および、各チームに周知徹底いただけますようよろしくお願い申し上げます。

敬具

#### 記

ニュージーランドラグビー協会は、以下について、競技規則の解釈の明確化を要請する：

近距離でのボールの争奪のためキックを狙いとして、ハーフバック/スクラムハーフ（または、他のプレーヤー）が「ボックスキック」を蹴った時、~~そのキックが~~ほとんどの状況において、ほぼ例外なく、ボールを蹴った側の前方にプレーヤー（通常、フォワード）の集団ができる。これらのプレーヤーは、**オフサイドプレーヤー**である。

ハーフバック/スクラムハーフがボールを蹴るのと同じタイミングで、通常は、自分の味方のプレーヤーを全員走って追い越し、ボールを争奪するか、ボールをキャッチした相手へタックルするか、または、単にボールが落下する位置に入ることを役割とした、**オンサイドの位置にいる味方のプレーヤー**（複数の場合あり）がいる。

現行の競技規則では、**オフサイドプレーヤー**に対し、オンサイドの位置にいる味方のプレーヤーの後ろへ後退することが求められている。もし、前方へと走ってオフサイドプレー

ヤーを追い越しオフサイドプレーヤーの前方の位置に入った**オンサイドの位置にいる味方のプレーヤー**がいれば、その**オフサイドプレーヤー**は遂行するアクションはない。彼らは、オンサイドの位置にいる味方のプレーヤーの後方になることになる。

以前の競技規則(2017年)においては、オフサイドプレーヤーは、キッカーの後方へ後退することが求められていた。ここで、キッカーが自分で蹴ったキックをチェイスしたとすると、現在の状況と同じこととなる(すなわち、オフサイドプレーヤーは彼らの前方へと前進したプレーヤーの後ろへ下がることが求められる)。

#### **明確化の要請:**

キックの飛距離が前方に向かって**10メートル以下**の場合、**もし**、オンサイドの位置にいる味方のプレーヤーが走って彼らを追い越し彼らの前方の位置に入ったら、オフサイドプレーヤーは、いくらかの距離を後退しなければならないのか?それとも、決められた地点まで後退しなければならないのか?

#### **ラグビー委員会の指定メンバーによるルーリング:**

移動する義務は、オフサイドプレーヤーにある。このプレーヤーは、味方のプレーヤーが自分を追い越すことではオンサイドにならない(競技規則**10.7(a)**で、競技規則**10.4(c)**のもとオフサイドであるプレーヤーを除外しているため)。オフサイドプレーヤーは、オンサイドの位置にいる味方のプレーヤーを通り越して移動しなければならない。言い換えると、**10メートル規則**においては、そこに立ったままオンサイドの位置にいる味方のプレーヤーが自分を走って追い越すのを待っているだけではいけない。実際には、オフサイドプレーヤーが後退し始めて、想定上の**10メートルライン**に到着するメートルライン前に、逆方向から来る味方のオンサイドプレーヤーと交差したら、再びオンサイドになったとみなされるが、そうなったときに正しい方向へ移動していなければいけない。立っていないプレーヤーもまた、すでにオンサイドでプレーしていない限り、立ち上がったらすみやかに後退しなければいけない。

まとめると、上記で説明されている状況においては、いずれのオフサイドプレーヤーも、オンサイドラインまで後退する努力をし、オンサイドの位置にいる味方のプレーヤーが自分を走って追い越すまでそうし続けなければならない。

※本件についてのお問い合わせ先

(公財)日本ラグビーフットボール協会

技術部門マッチオフィシャルグループ 競技規則担当

Email: referee@rugby-japan.or.jp